

觀世流改訂諸本

卷外二

特116

699

高野物狂

木曾

楠露

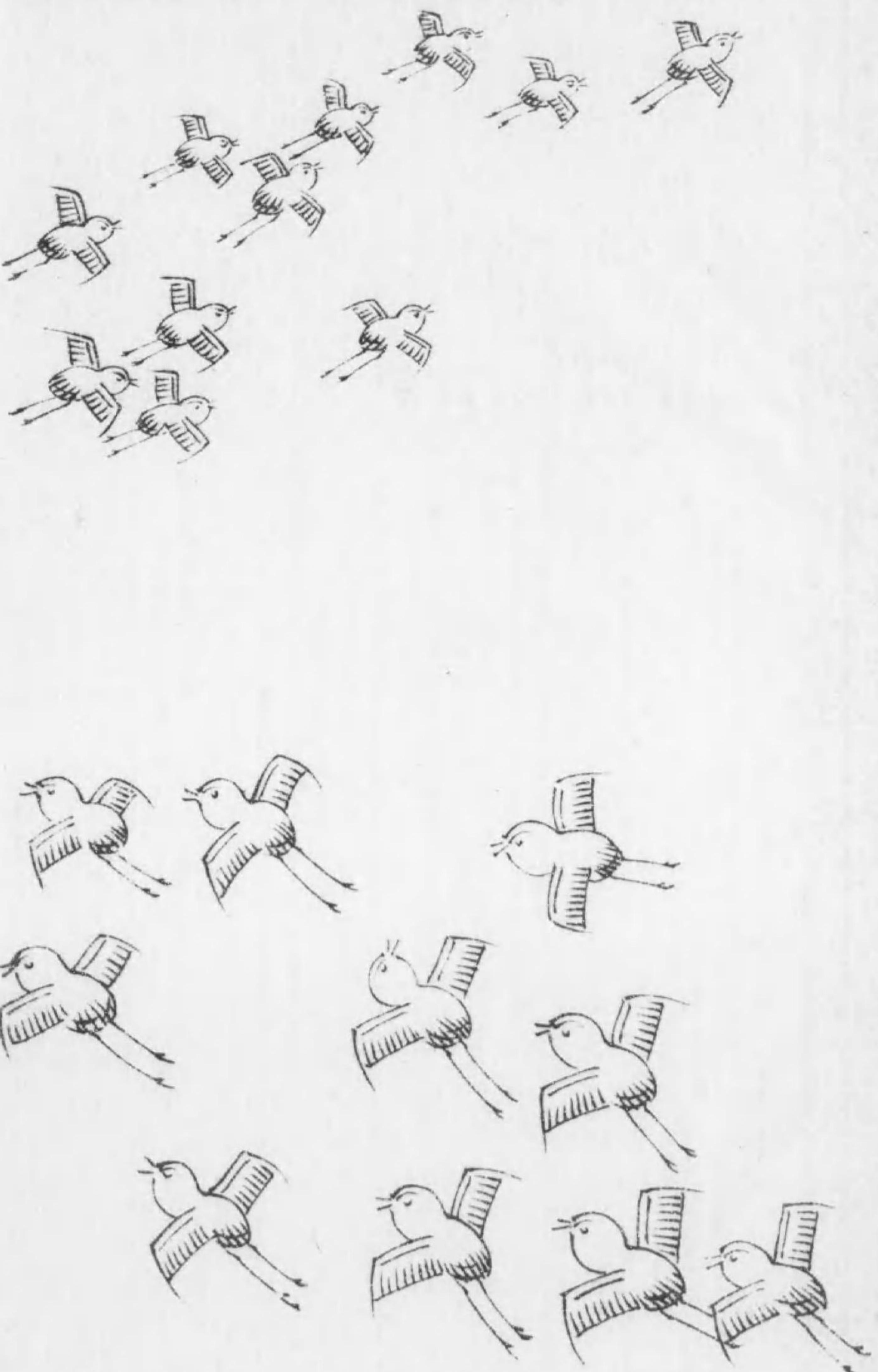
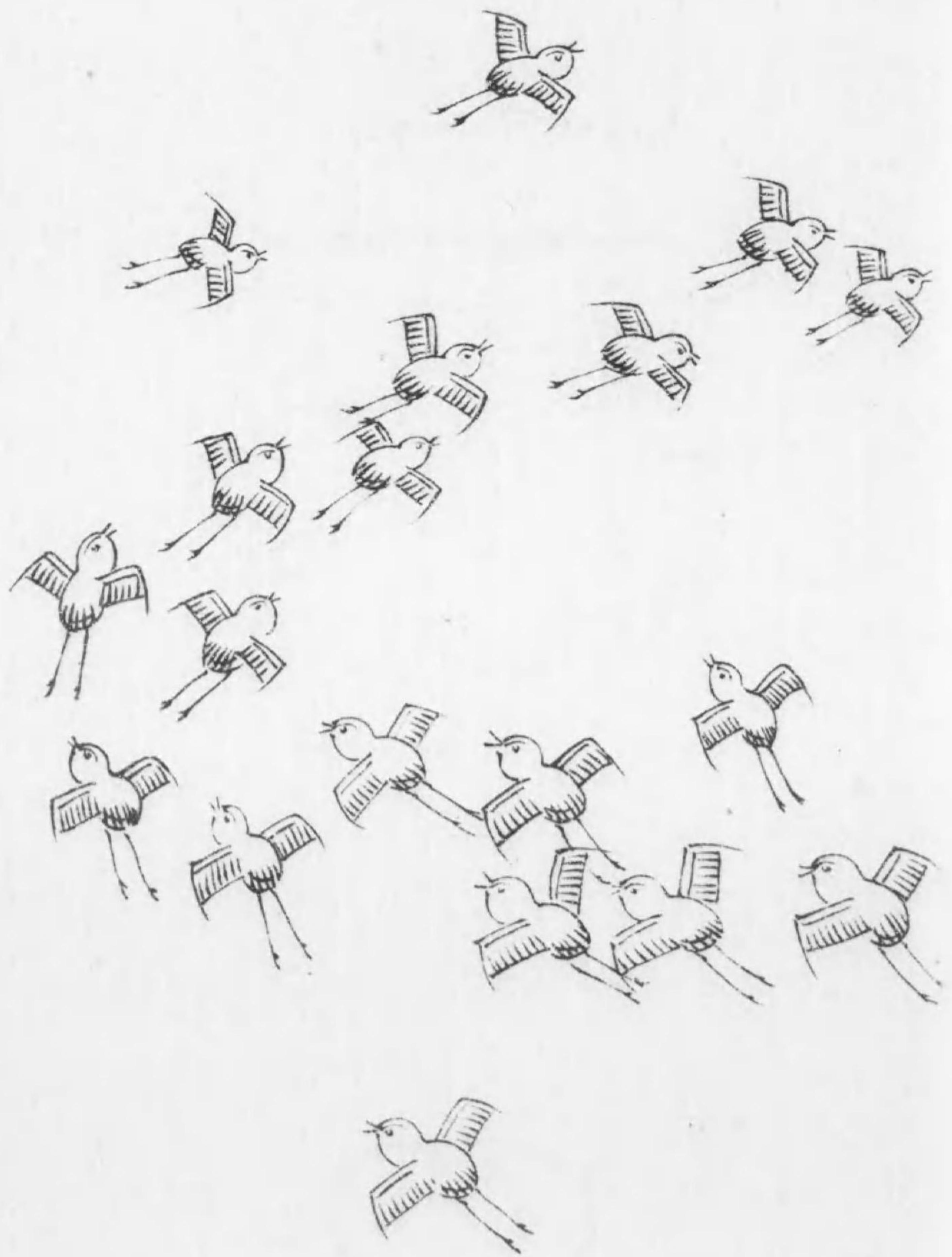
菊慈童



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 16mm 12 3 4

始





43 116
699



之清觀
長之世

大正
7.7.16
内交

文學博士

明治四十一年

本文監修

井上 賴園 丸岡桂之
大正五年 拍子附訂正解并補訂
觀世流改訂本刊行會 節附様式第一

高野物狂

解題

謠方梗概

高野四郎といふものの主君の遠児が廻せせしを悲し、氣して尋ね廻り、遂に高野山にて邂逅せらことをを作れり。曲名を署して高野といふ。中樂院儀に世阿弥の作なる由見え、能本作者説文には一所にせ阿弥の作とし別に亦作者不明としたれど、二百十番萬目録に安清作とあるは如何あらん。せ特殊の能作書た「丹後物狂」からやあふかか如北遊狂しき。

男物狂を作れる曲なるか狂女

物程に誠摯なる表情を須びす。シテ

す。初の名告以下は大きくハキハキと言ひ、サシは段めて殊勝に確りと出づ。あら思ひうらすやうに行き、終の「墨衣」立ちと旅歌の心に更へて確りと捉ふ。後の一薄墨にては聲を稍上方取り、かく挙げて出る。歸る雁の立と壇き、好く調に移り、方ヘルより稍厚きゆがたり、傍はれしよと別に出で。楊柳やかに誰かに机身に満ち、文とはたつがりと抜いて地に渡す。いつかきては前を乗けて出づ。問答は落着好く確りと應へ行き、車新しき仰かな。もう火一つかり連吟。昔薩摩の立ちと稍静に落ふ。サシはさらりと、クセの上端は穂がむべし。ワカは朝かに大きく、花壇場は派手々として普通の調子に近る。やあれにましますはしづらはかいつて出で。子

大方の子役と同じく、高めにさらりと落ふ。ワヰ

火一個を持つ程の心地

テの氣を承けてつゝましやかに抜り、書き残されしの下歌は更へてゆるやかに、次の上歌は派手にならぬやう精運びをつけて落ふべし。後の風狂したるときは前を承り、ふところ候と云々もすらりと、麻裳よしの上歌は引き立てて、交やかに達みなく落ふ。いつかさてしもさうりと取り、三鉢の舟の下たちはつきりと抜ふべく、問答を隔て、大师の待ち合ふ。云々は柳かゆるやかなるべし。クリ以下は高野山の有様を述ぶる處がれば改めて辭たる所好く確りとあるべく、クセは釋教の心を本とし、寂じを持ちて殊勝だゆがりきやうがるものか宣けれど、徒然地まさらるやう心附を要す。尋ね東いしは別に古で楊柳やかに大きく氣をかけ、時し小春のはゞくゆるやかに、花壇場より華やかにさうめやう揚まう好くからりて、落り、高野のうちにてはしづらりと附けて、始の清聖より段々大鎮む。クリの御袖なしとはかけ出でさらりと交やかに落ひぬむべし。

辭解

平松殿

平松の領主を尊びていふ稱。されど平松の名常陸にあるを聞かす。昔在靈

山云こ それは靈山に在りて法華と名づけ今は西方に在りて阿弥陀と名づけ、娑婆には觀せ者と現る。名は捕されども禪師の著書中だ見えず、巖山の傳記の作りたるものなきらんといふ。名法華といひて經名を出し他の弥陀觀音の佛名を譽ぐると異り、第二句の八字あらなすと文耶僧の作にあらざるは明けし。

悲心願 大悲心を起して、立てたる誓願。慈悲眼視衆生

法華經善門品の譜。慈悲の眼を以て一切衆生を平等一視する意。

誓普さこ 異觀

の誓願の普く一切衆生に及ぼすを日光の萬物を照すた譬へ、日の當らぬを聖代の恩徳に掛け、その恩徳を亡者の後世にまで及ぼし與へ給へと祈る意を從る。

受け難き人身 悲心願の大悲心を起して、立てたる誓願。慈悲の眼を以て一切衆生を平等一視する意。

折言普さこ 異觀

涅槃本經に「人身難得如優曇華」法華經功德品に「言此經深妙千萬劫難遇」平家物語に「人身は受け難く、佛教には遇り難い」。

如來佛をさす。佛十號の一員。如來者生するの義。

閻夜の燈あ 法華經藥王品に「如子得母如子得母如母得燈」。三途地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黑称。こゝには無爲涅槃の通に

樂無極。通俗編に「子成道、九種生天」。

入らばの意。清信士度人經に「棄恩入無爲眞實報恩者」。

黒衣こ 袖はわれけりしまで和歌の

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黑称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黑称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黑称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黑称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山といふ。弘仁七年弘法大師奏請して此山を開き、山の平地に金剛峯寺を創立して真言密教の通場とせり。三鉢の松

三鉢は三段の形の金剛杵

堂の前であり。其由來は下の本文に出てからが如し。地獄、餓鬼、畜生

生住異滅の四相の造作などを無爲に、

涅槃本の黒称。こゝには無爲涅槃の通に

幼尼に壁へ

たる若木の

花を承けて實の生らを身

のなり行きたいと掛く。二世の契

三世は遇者現在東來。主徳は

三世の契とへる古説あり。高野山

紀伊國伊都郡の

南邊に盤據する

山嶺。高山の頂に平野あらが故に高野山とい

は華林園中の龍華樹の下にて三度の法會を開き一切衆生を濟度すべし。**無人聲** 法華經の「寂寥無人聲」といひ、之を龍華三會の號といへり。次に慈尊三會の號とあらはこれなり。大同 天皇平城
聲とあらて據る。舊本「清淨」に作れるは「郷里」の轉訛なり。これを今人家にてへたるは拙し。**大同**
濟宇の年号、こゝには二年と作れども。菩証記弘法大師が支那にて三鉢を投げ高野山の松に懸りしことは眞濟
大師の歸朝は實は大同元年十月なり。菩証記の空海傳都清真雅の贈大僧正空海和上傳等大師遺弟の著作
並に元亨釋事、本朝高僧傳に見えず。宗性の日本高僧傳要文抄には「大同元年八月趣於本鄉、迄始之日、祈請發
誓云、學教法秘密、若有感應者、我斯三鉢飛到而默誓。仍向日本之方、授揚之、遂入空也。」其後に和寺廢遷
僧侶の大師清野山通範の大師傳復鳥羽上皇御作大師傳等に此事見ゆ。眞如は森羅萬象に攝在する平等無差別の理
菩葉の峰 高野山大塔の四方四隅に燒けたる峰を内八葉といひ、奥の院の外に桂木の外輪を外へ葉といふ。八葉は眞如法性的本輪は
現するを以て月影の萬象に宿らん壁立ふ。八つの谷 谷の名あり。平家物語に八葉の峯、八つの谷、まことにいふべし。其後に和寺廢遷
即身成佛 肉身の真まゝ佛となりの意。父母所生身即證興の院 大師の入室せらる。無常觀念
大覺法子といひて真言密教特有の所候なり。興の院 廟所のある所。無常觀念
云 深山鳥の聲、飛花落葉の聲まで、世の生死、常住の圓滿なる空覺の義にて佛果の異稱。光陰惜也べし
常住の云 生滅無常は又常住不變なる本輪の現象なれば、
然令佛道は法華經方便品の「皆令入佛道」の字を脱せ
るものか。圓覺行圓滿なる空覺の義にて佛果の異稱。光陰惜也べし
安樂と孰する述 聲は高野 高野に對く。畢竟ね來く。或は引 花壇場
夢も覺むるの意。聲は高きを 聲は高きを。或は引 花壇場
祈に配す。壇場は金剛峯。傳法院 聖惠法親王の内裏にあり鳥羽上皇の勅命を以て大治年中に創立せ
寺の主なる達物のちら處。高野山住僧 されしもの。後金剛峯寺の住持と北寺の學僧との間に紛糾を生じ
云應元年頃輪寺基を周國郡賀郡根來に移せり。今新義真言宗の根本道場なり。三寶院 莲華谷

四番目
畧二番

高野やモノグリ

無季 子方 春滿 九
シテ 高師四郎
ワキ 高野山住僧シテ曰
このへは常陸の國の住人平松殿よほく

申す。高師の四郎と申す者生て。侍

も頼み奉る平松殿へ。去年の秋室

あらを絵ひていひ。又春滿殿と申して。ま

千貫の座席。まだ幼く。まとももよ

よう。某もありたて申せとの座置玉を

程よ。行時も離れ申さゞも春滿殿を
もうたて申は。又今日平松殿のま思
日もては向。門寺より来らぞやと存は
サシ上ヨウク昔在靈山名法華。今在西方名門
弥陀。娑婆示現觀せ音。三世利益同
一體。げよあうがたき。悲願カツイ慈悲
視衆生悉く。慈眼視衆生悉く。誓

普き日の影の墨をあきせの門惠。後の
せやけて頼じあり後のせやけて頼む
あり。△狂言春滿殿の門丈もは法寶へ
あら思ひよらず。もあく門丈を
見うどゆとて。ひそかに受け難き人身
を受け。幸ひ難き如來の教法よ達
る事。間使の燭渡の舟待ちえたる

ひちも。われとがゆの夢のせよ。今を
捨てどもいたゞくよ。三途よむ隣らし
こと。歎きも猶餘りあり。此生より此
身をほめざべ。いつの時やら頼むべき。
然るよ「子出家をば。七せの父母成
佛をとしや。此身を捨ても無為もの
うべ。別れ一父母のあ事のみう。なまごの

親を助けひと。こへよ如りドと思ひ
きつゝ家を出で。修行の道よ起く
あり。父母別れ一其後。唯あととを
とひたまくよ。又そひ母そひ頼みつけ
かくとも申さで別れ。と。ちがうの
恩の父母よ。再び別れ。ひちも。ちがうの
を惜り。うりがまひて喜ね終るよ。

三年。うらうちよりぬき。身の行くへ
かも知らず申す。墨衣思ひたてども
か。竹、出づる。石破の袖へ濡れけり。
カヘテ
地下取中カヘテ
書を残され。一言の葉の。若木の花を
かみだして身のある黒い。ならし
上乘カヘテ
怨め。のむ事や。怨め。のむ事や。
たゞひせを捨て給ふ。手せの契ある
もの。

早次第上(三)
ものぞ。づくまでも。供よ。ふぞや伴ひ
絵をぬぞ。今。散りゆく花すの。頼む
木簷も嵐吹く。行くへや。しづち。雲水の。
跡を慕ひて。しづく。知ぬ道よぞ
しづよける。知ぬ道よぞ。しづよける。
浮せの夢。わかなぬべ。浮せの夢。よ
さぬぬべ。渠も。法を頼むあらう

とて。高野山の僧も。よどれよ成
度。やがてある日。ひづくさむ知らぞ
あり。絵ひ。お家の御望の由。て愚僧を
あ頼み。り。す。わ。す。み。る。人。も。や。は
う。と。様。よ。い。た。を。う。日。を。送。う。は。又
今。見。三。鈴。の。ね。よ。伴。ひ。て。慰。め。申。ま。そ
や。と。存。は。一声。薄。墨。よ。書。く。玉。章。と。見

ゆる。や。る。霞。め。る。空。す。晴。つ。雁。の。翼。よ
つけ。い。蘇。武。が。す。そ。れ。い。故。鄉。の。旅。夜。
君。を。慕。れ。ぬ。ふ。ぞ。か。く。わ。れ。も。主。君。の。所。
ゆく。へ。上。の。室。あ。る。跡。を。尋。ね。や。あ。よ
とは。う。ぐ。の。陸。奥。紙。よ。書。き。残。そ。文
と。そ。を。君。の。形。見。あ。れ。あ。ら。あ。ぼ。つ。か。る。の
脚。身。の。行。く。へ。や。あ。呼。子。鳥。カ。リ。誘。を

出の昔つかひもじよも。猶我アシタニ君
療ナシや。又アシタニ山アシタニの根アシタニよ道アシタニを。ばや
狂アシタニ登アシタニいざアシタニ狂アシタニ登アシタニらん。まち
昇アシタニる雲アシタニ跡アシタニの立ち昇アシタニる雲アシタニ跡アシタニのこゝ
りづく高野アシタニ山アシタニよ。まことに見アシタニればたゞと
やあ。或アシタニ人アシタニ念佛アシタニ稱アシタニ石アシタニの聲アシタニ或アシタニ鳴鐘アシタニ
鈴アシタニの聲アシタニ耳アシタニよ深アシタニみに澄アシタニみて。物狂アシタニの狂アシタニ

花アシタニの行アシタニくアシタニを奪アシタニねつて。身アシタニよ瀟アシタニる此狂アシタニ
トアシタニたる心アシタニある。肌アシタニ身アシタニよ瀟アシタニる此狂アシタニ
文アシタニをアシタニかアシタニそこうがアシタニみと。人アシタニや見アシタニしん
打上
麻アシタニ蓑アシタニ。紀アシタニの開アシタニ越アシタニえて。向アシタニよ向アシタニき。されや高野アシタニ
紀アシタニの開アシタニ越アシタニえて。向アシタニよ向アシタニき。これや高野アシタニ
の山アシタニ深アシタニみ。敢アシタニえみの木アシタニ薙アシタニわけ行アシタニけ。ともも荒波アシタニの山アシタニや。うと我アシタニづ方アシタニや思アシタニ

ひまむかひや キ ひづらひと
うまた。尋ねり人を道の人の便の櫻
をうあらぐ。なぞらは君よ達もざらんと。
わんどうよ新念て。三鈴の松の下よ。
立ち寄りて休まん。じたまちよりて休
まん。
子方句

ひだ。お黒毛を身つめり。高師の

四郎とゆき者にてゆが。其を尋ねて
かやうよ物狂とあうたうと思ひふ
早アサ言語道断。わうがむかのうひへ
暫く。思ふ子細のゆへど。まづ知らぬ
由もと銅をかけて吉贊へ。早アサ心得
申。不思議やあ婆を見れば黒形ある
あつねぬあり。此高野のうちへ通ひ

身。人よがめられぬかはよ疫う
疾う。出でり。ノアハ利益も
あま行か。人を毒ねて此山よまつを。
唯帝れどん情あやか。の境界清淨
の地よ。かう宣まつて高野の山を。晴り
生での唐説教。心得をとそらへとよ
づく宣まつて高野の山を。耳よ留

ある詞あり。げよもげよもじ宣と
申を。こゑ。憚り。多き詞や。うきうあ
がら。かくせを。遁て。身を捨て。山よ入
る。順義からもや。早。かくとおひと
人を。だ。毒ねま。われと其身を。捨ぐ
しや。毒なる主君も。捨ぐ。あれば。出家の
所供す。かく為。われも。憂愛の身を捨ぐ

あり。早かやうの生の望からば行
き様をどかへざるを。姿を更め
ぬこそ發心初縁の形あれ。早
まこと
發心初縁ならん。佛不二の道へ知れ
りや。事新シニ一き行かむ。かたドけ
あくもだ師の肉身へ。内心三昧。目前
あり。といぞよとべ。佛不二カタハ あり

珠勝ありげよ。大師カハシ は。生あり。あがら
生死涅槃よ。シテ。ひづ。定まつて。高野
の奥アハシ。今此山よまのあたり、群丈昔薩
埵の印明イハシ や授かり。慈氏アハシ の下生を
待ち給ふ事。大佛不二の妙體あり。
大師の待ち給ふ。慈尊アハシ 三會の曉アハシ
わかれ三世の。生君を尋ねて。この高野

山より來りたり。抑この高野山と申
さん。帝都を去つて二百里。一家を離
れて。無人聲。下されば。ま世の隱所
にて。結界清淨の道場たり。中よ
も此三鉢のねん。大同二年の度。停朝
以前。我わが法成就圓滿の地のちう。
よ残り留まれど。三鉢を投げさせ給

ひつよ。光とすもよ飛び來り。此松の
梢よとまれ。そもそも。諸木の
中よあきそ。林よ留もう其ため。一
千代萬代のまかけて。久くやれとの言
誓願。委く舊記よ載せられた。一
さへよ。眞如平等の松風ハ葉
の峯を。静よ吹き渡り。往生。縁の

月の影ハハつの谷より墨らぎりて。まと
まよみて會の曉を待つ如くあり。さて
こそ即身成佛の相をあらゆる之宣
の地を示す。従て深山奥の院。深山
鳥のこゑ澄みて。飛花落葉の嵐まで。
無常観念を勧むるといふても又常
住の皆念佛圓覺のよりをあらゆる

あり。突然れば時移り聿まうて
四季をうへ地のありづから。光陰
惜むべ。時人を待たざり。貴賤羣
集の雲霞。から高野の山高み。谷嶺の
風常樂の夢す。法の稱名妙音の。
首よ彌り満ち満ちて。唱へ行ふ。聞
法の聲ハ高野よ。静ある靈地あり。

上元又一
シテウカ上、元又一
中、舞
リ。二
雨鼓の奥の高

野
中
之

日中未正

シテア
中吉ラ
花ビ
宣場ア
ナ
ナ
ナ
ナ
ナ

花壇場日傳事古宮之葉三齋院

も。首を
うなづく。雲をハ奥の
見え。やうもん

あはる。高師の四郎。
そひへあきら。何を
かへまへ。考へたるぞ
。や。あへよ申
まもハ春滿殿シテ
含。底座シテ。何とて
かへまへ。あはる。あら情
きの門阿納アナや。

高意をばもぞ
背がんさとぞ

たとひ身を捨て給よ。いとどう
捨てさせ申もどか。心を静めて聞
めせ。平松の店舗を誰うつせ給よ
う。まづ此度へゆ。帰りあつて。さて
其後は。もしかも。高意をばもぞ。背
がんと。腰下。袖よどりつきと。三世の
契打ちせねど。これまで。幸ね紀の國や。

高野の山の陰頼む。主君よ達よぞ。轍
一キリヤー。
一さくあさべきよ。あらざれど。高
野の山をまちど。かたり慰め古里よ。
内供申し。帰りつ。さもよゆく。ま禁え
けり。これも。ま法をもめ。大師の惠
ありけりや。大師の惠ありけり

木曾

解題

別名を木曾頬書、**誕生**（羽生ともいふ）木曾義仲破並山にて植え八幡宮に請て、覺明が筆を揮ひたる頬書と鏑矢とを奉納して戰勝を祈り、やがて俱利伽羅の谷に大捷することを作れり。

謳ひ方梗概

然トテ勇健なるべー。シテ

堂々と一て迫らず、太く逞一からべー。出の一聲は大き

らべー。いかに申一上半身云々はハツキリと言ひ、又扶庄の土民と氣を更ふ。「表つてみはさらりに出てう八幡の宮の神風」とか、つて夷やかに達ひ地に源す。次の「表つてみはもすつきりと應ふ」

ツレ木曾、池田、共に健やかにテキハキと振ふべきも、木曾は主將な

れば威を有つて心あるが宜ー。素證の時は立衆を要せず、**地**抜けぬやうに附けて馳

みなく進ふ。頬書の後、木曾殿を云々は歸まり好く出づべくこれを頬書に云々はきらりめなるべ

一敵は木の葉と云々は承けて頗かに、次の固句亦引き立て、すらりと扱ひ、酒宴もすてに以下は

來つて城東たる趣に落ひなす。

辭解

八百萬神

も云 天照大神日本の地を治めしめ故はんとて、天御日子に天の鹿児弓と天の

鹿児矢とを賜ひ、天降らしめ故へること記紀に見えたるを引き、弓矢の

道の神代岐方久一きを述ぶ。八百萬は多く

の神を、鹿児の弓は鹿を射る弓なりと傳ふ。**木曾義仲** 源義賢の二子。木曾に在りて乳母の夫中原

の神を、鹿児の弓は鹿を射る弓なりと傳ふ。木曾義仲の軍を敗り、追襲一て京師を奪へり。故に作れるは其平氏を敗り一時

の事なり。後、播磨を極め一為賴朝等の反感を受け、範頼、義経に襲はれて壽永三年終に栗津野に戦死せ

り。享平三十一。そして毛平家は云

壽永二年四月義仲其將を越前に遣して檍城に守り一も、平泉寺長

史齊明の往及きたる爲、其二十七日平維盛等十萬餘騎に敗られ

り、東は越の白峯に接し、西は海路新道、水津浦、三國港に境りて北陸道第一の要害なり。ふ

礪波山 越中加賀の天和本、元禄本、共に坂礪波山まで攻め下るより

て以下いかに池田の次郎までの文甚く相違せり。**身方**は僅云 源平

記に(平家物語にも)五月十一日に、平家十萬餘騎を二手に分けて、礪波、志摩二つの道より、越中の國へ打ち入ると聞えければ、(中略)義仲中墨脚方五萬餘騎、一人一て敵二人に向ふ。彼等は馳せ疲れたる京家

西國の駆武者也、是は在國棄内の荒手也、思へば安平也、古例に任せて、初は七手に分けて、後は一に寄せ合せて、揉みに揉んで南の谷に追ひ斬すべしとて、方々手をもわかちけり云々。白旗

數多

云

平家物語に先づ謀に白旗三十流先主も、黒板の上に打ち立てたならば、平家これを見て、

は四方巖石なれば、搦手はよも廻らト、暫く下り居て馬跡のんとて、礪岳山にそおり居んすらん、其時義仲暫くあひしらふ體にひきがし、日を待ち暮一夜に入つて、平家の大勢を後の俱利迦羅が谷へ追ひ斬さんとて云々。黒板は長門本平家物語に、礪波山には三つの道候なり、北黒板、中黒板、南黒板とて三つに云々。俱利迦羅は礪波山中の俱利迦羅峠。大手は城砦の正門、搦手はその裏門なり。其身

は殊に立

平家物語に木曾、あが身一萬騎にて、小谷部のあたりを

控へてひ也。源平盛衰記に、「俱利迦羅の堂、國見、猿馬場の塔橋の邊に控へて」などあり。

御詫

せ。おほ

猿が馬場

平家物語に木曾、あが身一萬騎にて、小谷部のあたりを

控へてひ也。源平盛衰記に、「俱利迦羅の堂、國見、猿馬場の塔橋の邊に控へて」などあり。

矢谷

人池田次郎忠康を殺して

鳴鏑矢を射かはすこと、かまへて心にと

とあれど平家物語にはこれを載せず。たゞ

北

にあたつて

云

源平盛衰記に「北山のはづれに當つて、夏山の隣の木間より、敵の

玉墻ほの見えて、かたそぎ遠の社禮(平家物語)ありし。朱の玉垣は赤く塗りたる

神社の垣。かたそぎ遠は社殿の棟に組文へたる千木の片面を削きたるをいふ。

埴生

の八幡宮

礪波郡埴生村の護國八幡宮。源平盛衰記には「埴生に陣をそ取たりける」。

御領の地

神社の領地

源平盛衰記に「北山のはづれに當つて、夏山の隣の木間より、敵の

字なし。平家物語清本、道慶、通弘、光弘、光廣等」と言ひけるものなり。出家して西東坊(平家物語諸本、最末、三末、最勝等に作る)信教(平家物語一本、信教、信久に作る)と名をつきと云々。砂石集に「當時東大寺法師にて、信教得業として才覺の人ありけり、朗誦の註など一たらものなり」と云々。

願書

所領の贋服のうちより

源平盛衰記に「籠の中より矢立取り出し、墨筆に記して

讀誦本、最末、三末、最勝等に作る)信教(平家物語一本、信教、信久に作る)と名をつきと云々。砂石集に「當時東大寺法師にて、信教得業として才覺の人ありけり、朗誦の註など一たらものなり」と云々。

文書

文書を讀み起す間に

源平盛衰記に「籠の中より矢立取り出し、墨筆に記して

武器・料紙は所用の紙。筆をかくと

何々

文書を讀み起す間に

源平盛衰記に「籠の中より矢立取り出し、墨筆に記して

頂禮は頭頂を以てて菩薩の足を禮する。印度にて行はれり最敬禮。八幡大菩薩

八幡大神。大菩薩は神佛混淆の結果神をも崇めること。印度にて行はれり最敬禮。八幡大菩薩

めでいへる尊号。八幡宮は弓矢の神として特に

源家の守神とせらる。日本國。本來は支那にて日本を呼びて稱呼

日域

日本國

本來は支那にて日本を呼びて稱呼

とせらる。

朝廷の本主

代々の

天子の

御姓。

朝廷の本主

代々の

天子の

御姓。

或は伊勢大神宮と共に二所宗廟と崇め稱した

る(神皇正統記)其他より斯くいふなうべ。三身の金容

云

代々の

天子の

御姓。

天子の

御姓。

御姓。

蒼生 萬民・草木の生トテ蒼々然と多きが

思ひ合せて紹れるが、權柄

云

假のとひら。假に佛が神とぞ思ひ合せて紹れるが、權柄

云

天子の

御姓。

御姓。

四海をたなびくろに一

日本全國を掌中の物

王法

の如く抜いての意。王法

の定

義家を

指す。名

平相國 平清盛をさす。相國は太政大臣の唐名。

神明 神といふ

上指

上指の矢の畧。矢を箭に盛る時、二十五本の矢の中のうちに

蠍の部分を木にて圓く作り、中郡を空に一て三つの孔を穿ち、蠍の斧を斧の裏に附す。蠍の斧は

かまきり虫。陸車

に同ト。上指の矢の畧。文選に「蠍以蠍

蠍の斧を斧の裏に附すもの、稱す。即ち蠍の斧をいふ。蠍の斧は

真先に雁股をつけて、射る時に音響を發する様に作れる矢。

内陣 本殿の奥に神體

を安置する所。

伸

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

</

つなきをや、遙に照葉一絆ひけん。雲の中より山鳩（盛衰記には白鳩）三つ弔ひ乗つて源氏の白旗の上に翩翩すとあり。また同書に「鳩は八幡大菩薩第一の仕者なり」。旗手は旗風・加護・擁護・神力・神威。

神力・神威

願書（平家物語）

帰命頂禮八幡大菩薩、日域朝廷の本主累世明君の景徳なり。實報を守らんがため、蒼生を利せんが為に、三身の金容を顯し、三所の權柄を押し開き給へり。夏に一きりの年以東平相國といふものあり。四海を管領し、萬民を惱乱せしむ。これ既に佛法の怒、王法の敵なり。義仲苟も弓馬の家に生れて、陸に箕穂の塵を捲ぐ。彼異惡を案するに、思慮を顧る能はず。運を天道に任せ、身を國家に投ぐ。試に義兵を起して鬼退散戮疑なし。歡喜深こぼれて湯仰肝にそむ。就中、曾祖父前陸奥守義家朝臣身を宗廟の氏族に寄附して名を八幡太郎義家と號せしよりこのかた、その内景たる名帰駿せずといふことなし。義仲その後胤と一て首を傾げて年久し。今この大功を起すと、聲へば嬰児の貝を以て巨海を量り、幡斷が斧を振らして陸車に向ふが如し。然りといへども、國のため君のためにこれを起す。全く身のため家のためにしてこれを起さず。志のいたず、神鑒そらにあり。頗も一きかな。惜ば一きかな。狀一て願くは、冥顧威を加へ、靈神力を勧せて勝つとを一時た決し、怨を四方へ退け給へ。然れば即ち再新冥慮に叶ひ、玄舉加護をなすべくは先づ一の瑞相とも見せしれ候。

壽永二年五月十一日

源義仲致白

四番目
畧二番

木曾

五月

シツツレ 池田次郎
シテ 木曾義仲
シツテ 太夫坊覺明
ツレ 徒兵覺明義仲
池田徒兵

ツヨク

百萬神も引まぬをかごの名の弓
矢の道こそ久々けり
本曾義仲どん我事あり
平家へ越前の城を攻め落し。
都合其勢十萬餘騎。此鷹波山まで
押しよもる
身方へ僅五萬餘騎。

義仲

從兵 豊明 潤

計略をもつて防ぐ。そして白旗數多
とのべつて黒坂のよよか立てる。敵
の心を疑うため山中よたむらさせ。夜よ
のう大手搦みよう。一度よかうり惧利
也羅が、冷へ敵を落すと 上取用意を
あつて義仲ハ用意をあつて義仲ハ
勢を七手よ別ちて其身ハ殊よ精兵。

池畠

一萬騎をもつて防ぐ。そして白旗數多
のうちよける植生よ陣をそ
いづよ申じ上げよ。薩摩のかく黒坂の
よよかの白旗を立てよ。平家の
勢として見て。あちや源氏大勢向
たる。取るもられて、と高よ。といへ
便宜の處あうと礪波山の山中。猿が

馬場と申す處より陣をさうそくし
とを義仲が願ふ處あれ。さあらうだ矢
食。明日たゞ一。がまへて身方を戒め
戦をさうして。夜よひつて押寄せり
まづよそは。面よ其由申ゆへ。畏つ
ては。
義仲 いよ池田の次郎 池田 前よ
くいよ北よあたつて夏山のまげみの

うちよ。朱の玉垣ほの見えそ。がたそき
造の社あり。あひやせん。いづれも申そ。
いゝある神を掌め奉りたまご。御心は
あれこそ埴生のハ幡宮よ。わたらせ
絵ひ。此處もその顔の地よ。い
義仲 義仲何と無う。陣をうへよ。ハ幡の
所地あるこそ。吉兆あれ。いよ覺明

覺明

木曾

義仲

御前より

かつて後代の為。つい

當時の祈禱の為。願書を承らせずと

思ひにいよ。御詫の如く。此願書を

奉納あつて、然りべし。

さあらび

願書を書き

畏つては。覺明

作を承り

籠のうちよも。籠の

うちよも。小硯料紙をうだ。墨

書き終つて。前より
願書重習
書き終つて。前より
読み上ぐる
於て讀み上ぐる

覺明 中下下中下

御 命 真 禮

そり筆を和ける。思ひ案どる氣色
もあく。古書を寫もうかとてやうて
願書を書き終る

ハ隋大菩薩。日域朝廷の本主。累世
明君の恩裏。祖たり。寶祚を守らんが
ため。蒼生を利せんがためよ。自身の
金銭をあらそひて。三處の權廊をあ

開き繪へり。爰よあわうのとよう比方。
平相國といふものありて。四海をたかむトヨ
どくろう。萬民を懼私せむこれ。曾
佛ほの仇主法の敵ありそも。曾
祖文前の陸奥の守。名を宗廟の民族
よ隣附を。義仲いやくも。其後胤
がて。との大功をおこなひ。たゞバ

畢竟の巣を以つて。巨海を測り。幡
娜ナ音をとつて。陸車よ向よ如く
あり然ひ。さる君のため國の為よとれを
起きのみあり。伏ふと願やく。神明
納豆垂れ繪ひ。勝つことを究めつ
け。四方よ退け繪へ。壽永二年五月
日。高らかよ讀み上げたり。ウヤ木曾

敵を初め。其座より兵ども。
眞よ。之民の達者あると皆覺明を
ほゆ。義仲上差抜き出義仲上差抜き出
地地へ願書よどり添へて内陣内陣よ納め
よ。覺明よ賜えれば。覺明えれを
擣トドケけ持ち門前門前を立スてゆくも。
ハ藩ハ藩の室室よ集つけり。ハ藩ハ藩の室室よ集つり。

け。 覚明覚明

序上差序上差の鏑カブツラ。ハ藩ハ藩の室室よ奉納仕奉納仕
て。又此庄此庄の主民主民。軍軍の門門出出を祝祝。

義仲義仲

酒酒者者を奉りて。 やうめでたき事
ともあけれ。比度比度の軍軍よ勝勝たたざざ事
必必ずあ。からだ軍軍のの出出を祝祝べ。 覚明覺明

覺明覺明

畏畏つて。ハ藩ハ藩の

宮の神風よ

敵ハ木の葉と散りぬ

べ

義仲作

さよ覺明ひとかへ舞ひて

豊明

畏つては

上

敵

木の葉とちりぬべ

下

敵

酒宴も

も

も

も

も

男舞

キ上

酒宴も

も

も

も

も

も

きどよあらざあり。よ不思議やハ階
の方よりも山鳩翼をばづ。身方の
旗手よ飛び翔り。納戸のうちよを

表一けいだ。木曾殿をけいめ。軍兵
さも。首一向よ伏一样み。よ
護さと願ひける。なとこそ平家の大
勢を。想利伽羅。今よ。追ひ落。たと
一戦。勝利を得。まことよハ藩の
神力あり

楠
霑

卷之三

楠木正成、櫻井の群にて愛兒正行を誅し、板脚に歸らゝ事を作れり。聞く事
ば、妻多流にて櫻井を採用せしに倣り、又人がそれに基きて文を作り詮め、之に
附せしものなりと。

所六
觀世清

諸
以方梗概

仲光などに頼り、全篇悲壯の氣に満つるものなり。位の徒に重々とすら見て好まず。通じて助健に卒直なるを嘆くとす。

シテ

落着

楠木正成 櫻井の解題にて、愛児山行を諭し、板脚に歸らる一事を作れり。聞く所は妻多流にて、櫻井を採用せしに擬ひ或人がそれに基きて文を作り及め、之に廉が節附せしものなりと云へり。

謠ひ方便機仲光などに頼りし、金焉班悲壯の氣に満つるものなりと、佐の出でに重々とすむを好みす。通じて駄達に卒直するを宣へとす。シテ

トありて、あらへ。出の何事にて、ソレは精解を下めに取りて確りと言ひ、次の異つてゆかたにいかに中上位し、又下氣を更へて出づ。ロン手は聊か静大扱ひて、ぬやう又浮きやうやう心附け、演説にて詮めて謠ひ行き、怪の主従の心持にて確りとせし。シテ

渡す。清き名をしうけはさらりと、ワカは大きやかにすづきりとあらへし。シテ

役よりもを重く取る。然心得にて名告とハキノと言ひ、又存する。又氣を更へて次にいにかに誰かあると判にきらりと言ふ。シテ

聞かすち心下そ確りと扱ふが宜しく又満一トナリ。ちとは一息おきて改めて出づ。以下子方と云ふから可く、やあがなとまでして、ちとはかくつて強みにさらりと謠ひて邊に渡す。猪も洋徒シテ

着きてを國く。いかし博まし。やがてさるふをうちもべし。サン以下相静に、クセの上子

端は丈夫に。ロンギはおつとりとあらへく。かくて時刻もしうけは確りと謠ひ。初の山行も云くはさらりと附け。主く

金篇壁社の氣に満つるものなれども、位の
好まず。通じて勁健に卒過するを草とす。シテ
レは稍聲を下めに取りて確りと言ひ、次の「畏つて」
出づ。ロン等は聊か靜に扱ひて、粘らぬやう又浮きやう
終の「主従の」を心持て確りと地にシレ
力は大きやかにすつまるとあらし。シレ
告をハキくと言ひ、又存するより氣を更へて少く
滿一トしちもさらりとあらべし。シテ山行
又滿一トしちもさらりとあらべし。シテ山行
かかつて強みにさらりと謹ひて通じ渡す。猪も迷従し
ふたうちべし。サシソス下稍靜にクセの上
かくて時刻もさくはさらりと附け置く
初の「山行」もさくはさらりと附け置く

落葉の間、常の如く、御へめに発見されしは、やつま
トの語句は、高めに落葉の如きが、徳が着て、
さうなり。

詩解

朝敵草氏

延元元年
上せ

丁酉夏月
王之敬書

卷之三

其之與

卷之三

率みて西園

國朝文忠公集

櫻井の驛に至り、嫡子ふ行に遣詔せし事、太平記に詳し。兵庫の津は和田岬邊川尻附近の地也。市の一郭ともいへり。古里へおことあらむ。正成の殺御河内の圍を指す。太平記には其處を全勝と記せ。滿一恩地の名。正成の股肱の臣恩地左近太郎といへる人。正成の死後正行を助けて兵を舉げり。ト本朝武功傳と云ふ書に出でたりと云へど古き實錄に據る處ぢやれそらく内

山の西と今は
いたるこ

作の名な 千早 (河内國南河内郡金剛山の西南腹、正成の築けりといふ千早城のありし地。太平記に、ふるべし。) 成正行に邊境を守す條にて、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて降人は、命を養ふが失さきたむかて、義を記信が忠に比すべし、是や汝が第一の孝行をうらんする所。

弓矢の家 家最期 (武) 終。誰に面を向け候べき。人にはする頬あらへども。召し具し。

達。こざか。す。俗にこよくな。とちふに同じ。朝廷 (君主の政の出づる所)。

いか逆徒 (叛逆のと) 教説 (天子の廟こと) 計議 (みこと) 無くといふ。言の葉も

畏つて奏しけらば、尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛候ふければ、(甲署) 济方の疲れたる小勢を以て(甲署) 全戦致し候。濟方決定打負け候ひぬと覺え候かれば、新田殿とも唯京都へ召し候うて、前の如く山門(北家山迎磨守をさす)へ應じ成り候ふべし。正成も河内へ罷り下りは次第に疲れ落ち下り、济方は日々に遡つて駆せ集り候ふべし。其時に當つて新田殿は山門より推し寄せられて成は捕まにて攻の上り候。朝敵を一戦に滅す事ありぬと覺え候。計議 (意見・計略の) 計議 (意見・坊門殿 (藤原清忠・左近衛中將俊輔の子左大辨參議) 徒二位たり。せ々坊門京セられ、前に引ける正成の奏上をこぼみて兵庫に防戦すること。太平記に出づき。) へは反對意見。日月 (日月を天子に雪霧子 (日月歎詞) 浮雲掩ひ)。良薬口に苦く。孔子家語に「良薬苦於口、而利於病」忠言送於耳、而利於行ことありて。平家物語にも「良薬口に苦く、醫耳に利く」。太平記と異は同文。さか其故事を云。前の「後言」には「捨て捨て」の誤か。元弘三年北條高時謀に伏し天平定せらじ及び天皇(後醍醐)や政に憲み恩賜盜賊に流れ大内を營建し、遊宴騎射等に舟船を造り給へり。藤房屋上言したれども聽かれず。一日冬内にて御前に候。候。其事となく、禁の達。封の臣北干が謀をすて殺されたる事。又伯夷叔齊の故事かとぞゆき。上方にて東明に退出せらまし。北山の岩藏に赴きて遁世。法華トトナリ。こと太平記に見ゆ。こゝには「義大藤房卿は

世を過れ、今まで成。藤房の卿 (藤原宣房の子、右大辨、參議、檢非違使別當等を歴て中古の意に蒙れり。) す。 そきの返さ。今此の門も死を決せられれば再び引き返す。 事はせじとの意を弓矢の縁にて破る。 頃猛の心を失ふ用ふる竹馬白やるを節清くとあひ飾る。獅子の子を。 獅子は子を谷に落して其勢を試みると云ふ。 其故事を云。 下平定せらじ及び天皇(後醍醐)や政に憲み恩賜盜賊に流れ大内を營建し、遊宴騎射等に舟船を造り給へり。藤房屋上言したれども聽かれず。一日冬内にて御前に候。候。其事となく、禁の達。封の臣北干が謀をすて殺されたる事。又伯夷叔齊の故事かとぞゆき。上方にて東明に退出せらまし。北山の岩藏に赴きて遁世。法華トトナリ。こと太平記に見ゆ。こゝには「義大藤房卿は

鄙人 (田舎) の人。菊水 (千代に傳へて開くといふ)。

の家紋を菊水と記せらる。慈童仙人の菊水の故事(菊慈童枕慈童参照)によそへ佳名えりからべいとの意に立たゞく。瀧川は其水源一は天王谷より一は島原谷より出で、石井村に會して南流し。神戸市福原町及東川崎町の西を過ぎて海に入る。正成は北川の共に若きより斯く號ら。花橋 (楠氏の橘諸兄の後裔にて橋氏なると、花橋は向香しきも

四番目
畧二番

捕露

五月

シツ子ト
テレカモ
満正從
一成行者

之句
とれハ捕ニ威アリ。ナキモ朝敵尊民
大舉ノテト上席モジギ由聞メナハ。
急がヒ成ヨ馳セ向ヒ。義貞ヨ力を全セ
ヨモの宣旨ヨ任せ。唯今、兵庫の津ヘ
罷フナリ。又在ざる所細のに向ヒ行を
お里ヘ返スルヤ思ひ。ソヨ誰うある

聞前より満てよし行をつれて此方へ
來れど申ゆへ畏つて。いよ恩地殿
よ申ひ何事もぞ。若君の事供
申しえ。急ぎて本陣へ声集りあひとの
事事よそ。畏つて。さよ申しけば。
若君の事供申して。さよ行。唯
今申す事をよそへ。間かねに備も。此
度の出陣。成討死を以て時を至る
たれ。それよつまくして行へ満てを伴ひ。
千早よ晴り。命のあらん程に忠勤。
よを敬ひ下を憐み。某う志をつむらへ。
又満よ。正行の成長の程を頼む。あ
れを此せの別と思ひて。急ぎて里へ
帰り。一子方子方。仰謹んで承り。さへあがら。

らきの家よまへ。その最期をよそよ
見て。誰よ面を向ひし。唯足一鼻
て。絵よりて。アザガト。かく事を申す
者ある。て。皆朝廷の事為あれど。とく
とく千早よ晴りて。シテ。君の事為
あうとも。罷り晴る事ハありがたう。は
やあかほよめど。之が由も事よ後をざる

や。恩讐の子を呼うけられ。地主上
満一も。出行も満一も。何んよびきの
葉も。立く立く袖を志ほつて。農つたる。
氣色わふ畏つたる氣色か。此六
語つて。向うせひべ。れても逆徳尊民
兄弟。西海よう。大軍を率ゐ。上洛を。き
よ。獻向よ達。急がじ成よ馳せ

向ひ。義貞もうつゝの追伐を、さかの轟
詔あり。少成謹んで申上ふるやうへ。
此度は、徒罷つて事。新年といふた軍
とどひ勞れたる官軍を以つて、いじめ
はらん事。あくへ存するよしも。義貞を
召へ及ばれ。今一度、獻山へ行幸す。
奉りあるべく宣逆徒上陸仕はべ。其時

正成へ糧道を絶ち。義貞と内外より
攻めゆきよ於して。恐あづら威勝利
競ひあづび。こゝぞと。必勝の計議を申し
よどみとし。とも。坊門殿のかくへて。
既に防戦よ定ま事。偏よそ軍のをもを
ありあり。地氣と。日月と。よく明らか
ざむ。雲霧が光を覆ふあらひ。今よ始め

ツレサシト
・サシタセ獨今

ナシ

ぬ事あれども歎きても又あまりあり

良薬口よ苦く忠言耳よ逆よとひよ

其故事を悟り絵ひ藤原の卿へせを

通れ今を成づて出もうとさへ返す

夫の猛心乎清く

ゆふと思ふ

獅子の子を生

みて三日を経つ時數千丈の巖よう

とれを投げて試る其子獅子の氣力
あれば教へざるよ中より跳ねやへて
死せずといへり。沒しや亡行。十歳よ餘
りぬ。一言耳よ留めつ。此教戒よ羣を
ざれ。あれ討死と聞くとも歎きをとど
めづくまでも朝敵を平げて。貞軍の
開けん事を思ひ

日の本よ 地羽との一嘴を鳴らすとも。

命のあらん其程へ帝位を守護

私の心しきをあき跡よ汚名を残せ事

あらへ。生ひ乍ま思ふ換すよがる便や

捕の露。時も頃へ五月雨のあつ

枝も繁る下草の寒よ志をも秋や

花散りて春は暮れり櫻井の左よ

だよありて打ちせざる 石よある

てま捕の葉の恨む何うあまざかる

鄙へまでもあきて知る 因愛

子方外親子 生徒の別も今更よ後を

袖よ満一。お酌よ立ちそりあへそ

清き名を。千代よ傳へて菊水の

地流々と。漫作 諸人の鑑と

卷之三

六

菊慈童

解題

魏の文帝の臣下、勅を蒙りて郿縣山の麓に流るゝ薬の泉の源を尋ね入り一に、周の豫王の時より菊水の仙術を得て七百歳を経たら慈童といふ仙人、菊酒の術を授け奉りて道舞をなしたとを作れり。太平記によでたる慈童の故事に基き、重陽の宴に用ふる菊酒の謂を作れらるものなり。古くは前後二節より盛る長篇なりが、後世専ら祝言能とて演ずる便を旨とし、其前段を肴も、短の文をも略めて、今日の如く單純の曲とせり。肅かれたる前段は、豫王の弋に慈童當つて書の可え

議方梗概

(後曲)は皆此曲に學ひたる復作なるが如
候是量の姉妹曲なり。全篇輕くすら
りと、陽巴やかこぼやけ。

童子なれば重くならぬやうに注意し
も爲り下に取らんことをす。

卷一

講ひ方梗概
機懸壇の姉妹曲なり。全篇軽くすらり
りと、暢じやかに爽やかなうべし。シテ
なきを宣一とす。サシは其の身のなれる果を即ちつぶやくになれば、さて厚を抑へず、又沈鬱に陥ら
ぬやうさらりと達ふ。口キとの向鑒になり、「人倫通はぬ」と云ふは穎やかに勇け鑑へ、「不思議や
起りて少一からつて向ひ、「いや獨も云々はすつきりと出でて、「かたトけなくもすり丁寧に言ふべく、次の
脚全、杭の要文疑ひなくはさらりと取り、連呼にて脚が鍛めて殊勝に成ふべし。「あ」がたの妙文やなほ位
を有ちて大きやかに確りと出づべく。トキ
口キ 健やかにハキく、とあるべし。名器の後、「急ぎ」
より薬の酒なればは音の繕半好く達ふ。
云々の上段はシテの氣を承けて頃ゆるやかに附け、「頼めに」より脚が更へて少一氣を起す心をもべし。
足妙文を「云々は精辟」りめに承けて、樂の前、「面白の遊舞やな」と十分に鎮む。「すなはち妙文」以下は參つて
爽やかに調子よく扱ひ、引き續きキリにかけて、通して脚代を埋ひ、齡をことぶく心をもべし。

國の魏。曹
の子、丕。魏

ればならへーの意とす。枕邊臺の次第は缺曲より取
河南府鄧州内鄧縣にあり。鄧州記に「鄧縣北八里有
菊水」。後史方輿紀要に「菊潭」、在鄧縣北、源出縣西

北之石洞山、匯而爲潭、傍生甘菊、其水甘香、居人飲之多壽、隋因缺名焉。潭縣太平記に「彼の郡縣といふ處は帝城を去ること三百里、山深うへて鳥だにも鳥かす、雲深うへて虎狼充満せり。されば假に山に入るもの生きて帰ると、いふことなし」。又「慈童渴に臨んでこれ(菊の下露の滴りたる谷水)を飲むに水の味はひ天の甘露の如くにして怪も百味の珍に勝れり。(中)黑蛇谷の流の末を汲んで飲みける民三百餘家、皆病即清滅して不老不死の上寿を保てり」。太平記の慈童のこと記せる條(十三卷船馬進奉)に、慈童郡縣山にありて穆王より賜はり一善門品の二句の偈を前の大業に書きつけ其下露をすり功徳により八百年の間老を慶えず、魏の文帝の時彭祖と名を更へて帝に延年(下露の仙術を奉り)たり、今の重陽の宴は其名残なりとあり。但慈童と彭祖とは實際は別人なり。邯鄲の枕の夢生龐といへる少年、邯鄲の宿舎にて道士の枕に臥し、夢に王公の身となり一生の榮事を盡したと見て覺め、故事、邯鄲の辭解參照。慈童が枕太平記に「慈童」と云ひける童子を穆王寵愛、詮ふに依りて恒に帝の傍に侍りけり。或時彼の慈童、君の宣位を過ぎけらる、遂りて帝の御枕の上をぞ越えける處とぞ憂へける、辟議止む事を不得して、慈童を郡縣といふ深山へぞ被へ送ける。古への云慈童の持てる枕は、產生が百年の樂を夢みし枕引發にやと思はる、も見出でず。以下の文、慈の聲の類みにはふりぞ生れるなど。賴めに云引發にやと思はる、も見ざれば樂みを待つこと無しとなり。時つをねた、非トを嵐に掛く。身を知る袖海に漏れたる袖。それに我身の古今集に「上昇身を知る袖ならずして獨寐る時、共寝の枕に交へたる詞を恨む意なるを、意童が君寵を換ふいかなく、右殘の枕につけて怨恨多きことに取りすした

王代の王・周の代

武王より穆王まで三十七世。次第に變る

人倫變化・性・周の穆

年太平記には八百餘歳もあり。但、穆王

非想非外想併故にて三界の中、無色界の最高頂にありとする天。於天にては八萬劫の壽命を

保つと

二句の偈太平記に「穆王慈童を慕ひ思ひければ(中略)著

要文主要なる文句。

具一切功

徳所謂二句の偈文にて法華經善門品に出でたり。一切の功德を具へて慈眼をもて衆生を

葉視・福聚の海無量なり。是の故に應に頂禮すべしと訓すべし。福聚は福德の聚り。

年太平記には八百餘歳もあり。但、穆王

非想非外想併故にて三界の中、無色界の最高頂にありとする天。於天にては八萬劫の壽命を

保つと

二句の偈太平記に「穆王慈童を慕ひ思ひければ(中略)著

要文主要なる文句。

具一切功

ふ處は帝城を去ること三百里、山深うへて鳥だにも鳥かす、雲深うへて虎狼充満せり。されば假に山に入る人の生きて帰ると、いふことなし。又「慈童渴に臨んでこれ(菊の下露の滴りたる谷水)を飲むに水の味はひ天の甘露の如くにして怪も百味の珍に勝れり。(中)黑蛇谷の流の末を汲んで飲みける民三百餘家、皆病即清滅して不老不死の上寿を保てり」。太平記の慈童のこと記せる條(十三卷船馬進奉)に、慈童郡縣山にありて穆王より賜はり一善門品の二句の偈を前の大業に書きつけ其下露をすり功徳により八百年の間老を慶えず、魏の文帝の時彭祖と名を更へて帝に延年(下露の仙術を奉り)たり、今の重陽の宴は其名残なりとあり。但慈童と彭祖とは實際は別人なり。邯鄲の枕の夢生龐といへる少年、邯鄲の宿舎にて道士の枕に臥し、夢に王公の身となり一生の榮事を盡したと見て覺め、故事、邯鄲の辭解參照。慈童が枕太平記に「慈童」と云ひける童子を穆王寵愛、詮ふに依りて恒に帝の傍に侍りけり。或時彼の慈童、君の宣位を過ぎけらる、遂りて帝の御枕の上をぞ越えける處とぞ憂へける、辟議止む事を不得して、慈童を郡縣といふ深山へぞ被へ送ける。古への云慈童の持てる枕は、產生が百年の樂を夢みし枕引發にやと思はる、も見出でず。以下の文、慈の聲の類みにはふりぞ生れるなど。賴めに云引發にやと思はる、も見ざれば樂みを待つこと無しとなり。時つをねた、非トを嵐に掛く。身を知る袖海に漏れたる袖。それに我身の古今集に「上昇身を知る袖ならずして獨寐る時、共寝の枕に交へたる詞を恨む意なるを、意童が君寵を換ふいかなく、右殘の枕につけて怨恨多きことに取りすした

王代の王・周の代

人倫變化・性・周の穆

年太平記には八百六十七年と傳ふ。

次第に變る古くは「數代に變る」とあ

り、「次第」は後世の誤傳。

七百

年太平記に「穆王慈童を慕ひ思ひければ(中略)著

要文主要なる文句。

具一切功

徳所謂二句の偈文にて法華經善門品に出でたり。一切の功德を具へて慈眼をもて衆生を

葉妙文を開くを菊の葉に掛く。太平記に「慈童、君の恩命に任せて、毎朝に一反妙文を唱へけらるが、

の葉における下露、崖に落ちて流る、谷の水

に滴りけらる、その水皆天の靈藥となる。

不老不死の藥太平記の引文參照。

波む人も云

遊舞やなまでは古き漢本に無く、疑間にサシ、クセの長文あり。前シテを畧へた

ると同ト理由にすり、曲を短くせんため、この入れ更へをなしたるものなり。

外遺集の歌を引く。裁痴の菊の白露

けふ毎に幾夜挂りて淵とぞもらん。

宵の間月は宵、その身も牌ひ

と云ひて文の後を續す。

一またへの故に冠する候間。

と云ひて文の後を續す。

不老の藥なりと言ひ馴はせられたるに由りていふ。

花季篇菊花を題に草

藥の酒不老の藥なりと言ひ馴はせられたるに由りていふ。

補就と傍く。

花季篇菊花を題に草

藥の酒不老の藥なりと言ひ馴はせられたるに由りていふ。

補就と傍く。

花季篇菊花を題に草

四番目
累脇能

早次第上

(三人入)
ツヨク

山より山の奥までも。山より山の奥ま
でも道あるや時代あるらん。これ
奥までも

魏の文帝よはへ坐つて臣下あつ。かくても
我の君の宣旨よれ。鄆縣山の麓より
薬の水涌き出でたり。其水上を見て
ありてその宣旨を被り。唯今山路よ

菊慈童

九月

ワキテ 慈文帝臣下童

赴き。意が程よ。これはや酈縣
山より著せしも。これよ庵の見えを。
まづ此あたりよ徘徊。事の手續を
窺ふとやと存。シテサシ上ヨワツモレ耶。鄭の
枕の夢。樂むこと百年。葦童^{アシドウ}う枕へ
まづの思ひ寢あれど目もあをぞ
莫^モりあ。ソつ樂みをねぐなの。どう

樂みをねぐ根の。嵐の床よ假寝^{カイニ}て。
枕の夢^{アシ}。夜ゆき。がら身^{カラ}をまう袖^{マモリ}にほ
さへ。頼め^{アシ}。がひこそあけれひと
り。なの枕詞^{アシコト}を恨^{ハシ}ある枕詞^{アシコト}を恨^{ハシ}ある、
不可思議や。此山中^{アシ}。虎狼野^{カシ}キの
桺^{スミカ}。思^{スミ}よ。とてある庵の向^{アシ}。も現れ
出づる姿^{アシ}を貞^{アシ}。其様^{アシ}け^タる人間

あり。いゝある者ぞ志を志のへ。ノ倫
通をぬ處ある。其方を心を化すの
者と申せば。これ、周の穆王よ
召し使を以て。慈惠シカヒ重タメがおれつ黒スルカヒを
まよヨク。こゝへ不思議のじひ事コトや。

不思議やわべ。其もくとも。昨日や
今日。思ひよ。次第は變つとのゆみ
えん。かく移シテるの位スルによ。今魏の
文帝。前後の向。七百年よ及びたう。
非想非非想へ知らむ。向よおど。今
まで生ひる者あらず。いつかなむ化生の
者やら。身の性セイのせざりよけり。

シテ
いや猶もそよがたとぞ。化生の者とく申
まごけり。泰^{カタシケナ}も帝の御枕よ。古の
偈^ゲや書^{シテ}は添^{タマ}へ賜^{タマ}たり。立ちまう枕
を、座贊^{シテ}やよ。早^{アリ}かん上^{アリ}、
これハ不思議^{スミレ}議^{ガシ}の事^{アリ}。あ
あ。おの^ノ立ちよう讀^リみて見^ルべば、
シテ^{カニ}三^ミ一^イ一^イ一^イ一^イ一^イ
枕^{ヨワク}の要^{メテ}と詮^シひしむ
具^{スル}一^イ切^{カツ}功德^{トドク}慈^シ眼^メ
觀^{スル}衆^{シユ}生^{スル}福^{トコロ}壽^{トコロ}海^{シマ}無^シ量^{シヤウ}是^{シテ}故^{トコロ}應^エ頂^{タマ}禮^ス

地上アカ此妙文アシタマを菊の葉よ置く志たゞりや
霧の身ウツクシノヒの不老不死スラバシの薬クセとあつて
七百歳ナナヒジイを送りゆ。假マハにも假マハまき
千尋チヨウジンをあらし。面白マダラニの
樂シテ
地アカ上アシタマ此妙文アシタマを菊の葉よ置く志たゞりや
霧の身ウツクシノヒの不老不死スラバシの薬クセとあつて
七百歳ナナヒジイを送りゆ。假マハにも假マハまき
千尋チヨウジンをあらし。面白マダラニの
樂シテ
地アカ上アシタマ此妙文アシタマを菊の葉よ置く志たゞりや
霧の身ウツクシノヒの不老不死スラバシの薬クセとあつて
七百歳ナナヒジイを送りゆ。假マハにも假マハまき
千尋チヨウジンをあらし。面白マダラニの
樂シテ

寒ミクより草タチバナへ繻アラシりも匂カガミひ。闇アマツもあ
るや。谷陰タラシの水ミズの處カタは、郡カント縣キニの山サンの
縫アラシり。菊水カキツバタミズの流フサガリ。づみアラシり木キより酒サケあ
れだ。汲アラシみてへ進め。抱ハグしてへばぞとし。
然アラシら身カラも飲アラシむあり。飲アラシむありや。宵アラシ
宵アラシの向アラシ其アラシ身カラも醉アラシよ。ひやれてよう
ようようくへと。たゞよひようて。枕アラシを

とうよげ戴アラシかまなり。けよもあうがたま
君アラシの盛德アラシと岩根アラシの菊アラシを。手アラシ折アラシりあせ
手アラシ折アラシりあせ。志アラシまたへの袖枕アラシ。花アラシを席アラシ
よ臥アラシたりけり。本アラシより薬アラシの酒アラシあれば。醉アラシよも
れぞ。本アラシより薬アラシの酒アラシあれば。醉アラシよも
侵アラシざれど。其アラシ身カラも度アラシらぬ。七百歳アラシを。
なむちぬる。此アラシ所枕アラシの故アラシあれど。いさ

よも久くまき千秋の帝。萬歳の我が
君と祈る慈童が七百歳を。我づ君よ
授け置き。處ハ鄧縣の山踏の菊水。
くめやしまぐや飲むとも飲むとも盡
きやドや盡むやドと菊やさわきて、
山踏の仙家よ。其まゝ慈童か。ひよ
けり。

大正七年七月十五日印刷

大正七年七月二十日發行

觀世流改訂本正版



訂正者 丸岡

觀世流改訂本正版

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 桂

印刷所 東京市神田區今川小路三丁目九番地 桂

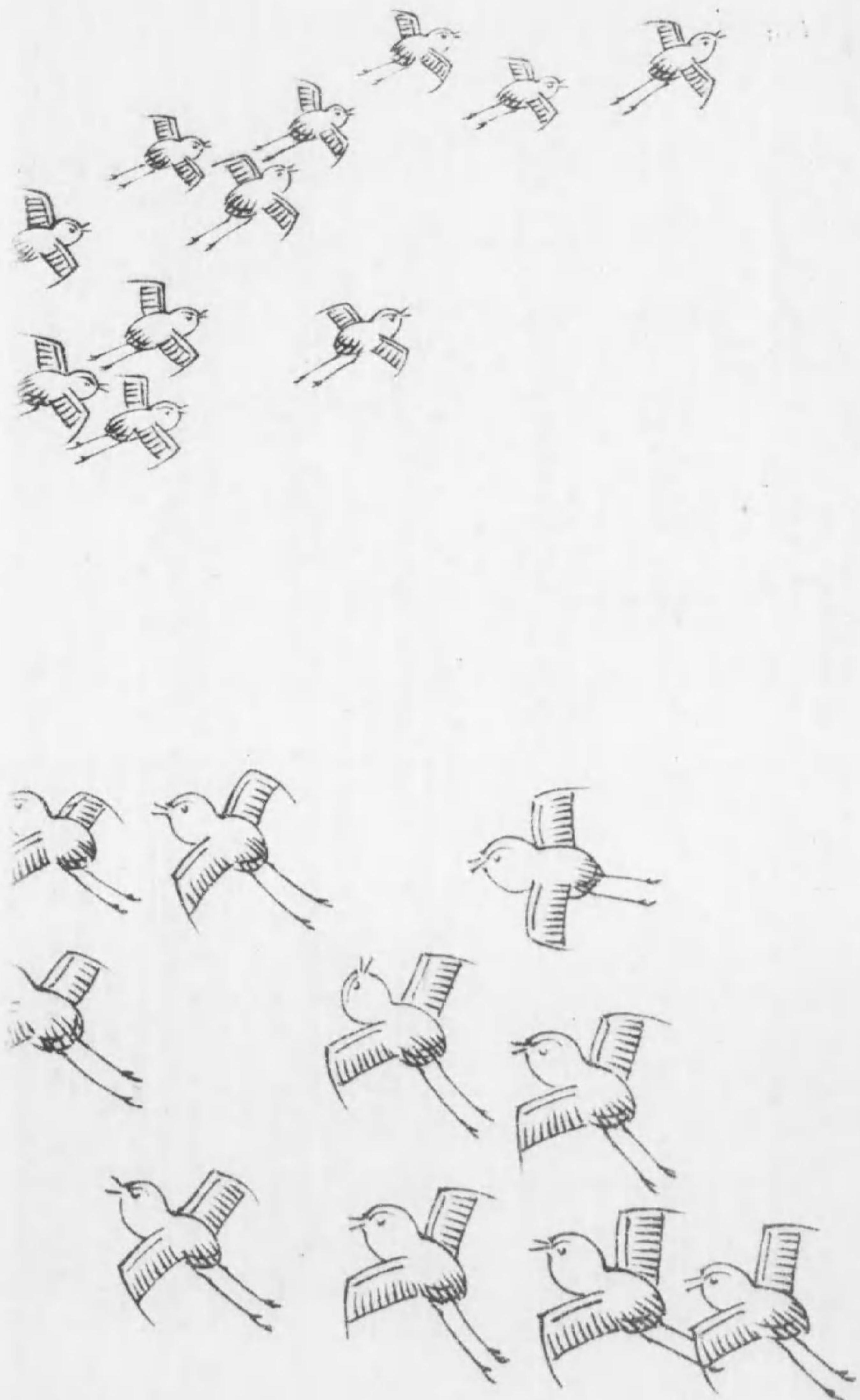
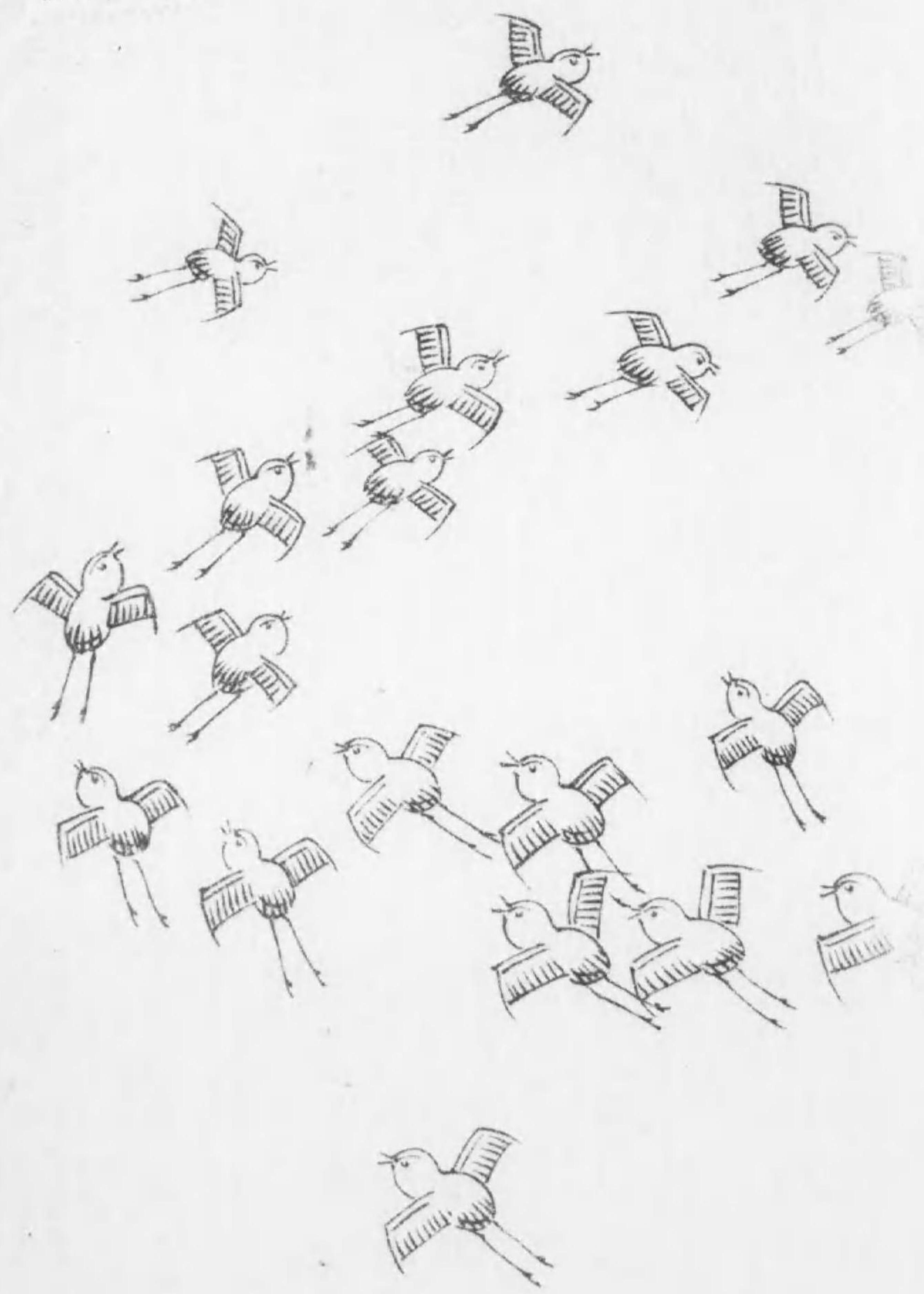
印刷所 七條式金屬版印刷所

發行所 觀世流改訂本刊行會

電話東京一三六〇九番

郵便東京一五四七五番

272
406



終

